

# 語の通時的変化と意味の重層性

Jane Austen の小説にみる *amiable*、*sad*、*condescension* の評価的意味

松谷 緑

Jane Austen's Use of Words in Social Context  
in the Time of Late Modern English

MATSUTANI Midori

(Received September 24, 2021)

## Abstract

This paper examines Jane Austen's use of the words, *amiable*, *sad*, and *condescension*, to see how she creates and develops the characters in the novel. This also contributes to the philological study of the English language, especially in considering Vocabulary of Late Modern English.

There is a way of thinking that once a text leaves the author's hands, a reader can deconstruct a text and create his or her interpretation, in this paper, however, my interest lies in the language in Jane Austen's day. I consider what the writer meant by the words in using them in the social context in the time of Late Modern English. The meaning and the significance of the word in the text largely depends on the context.

We do not find many examples of *condescension* in her novels, but fewer is not insignificant. The word has something to do with the difference in social status among characters and the superior's dignity. At the time the word is in a state of change of its semantic prosody, from positive meaning to negative meaning.

## はじめに

言語は生きている限り変化する。ある言語コミュニティによって日常的に使用されている言語、つまり、実際に誰かに使われている言語のことを 'living language' というが、使われている限り言語は様々な変化をする。死んだ言語 'dead language' というものが存在するののかといえば、世界には多くの失われてしまった言語がある。あるいは絶滅の危機に瀕する言語、すなわち、少数となった民族の言語で話す者がいなくなり消滅する言語がある。

死んでなお残っている珍しいケースがラテン語だと言われている。今では日常的に使う人々はいないが、特別な儀式的場面では用いられることがある。そのようなラテン語はもはや変化することはない。

言語の変化は音声、統語、形態、語法、語彙といったさまざまな部門で見られ、その変化の原動力はその言語体系自体の整合性や経済性による場合もあるが、特に意味変化においては使用者のニーズにある。使用者集団としての社会の変化や、個人の表現の可能性への希求により、長い時間をかけて語の意味も変化しているのである。本稿では語の意味について論ずる。

## 1. 文学作品と通時的語彙研究

次の引用にもあるように、過去の文学作品を読む際、現代の意味で解釈すると誤解が生じてしまうことがある。

When we read the literature of the past, we can easily be misled by the influence of the modern senses of words. How can we know what a writer in the past really meant by a particular word? (Hanks 2013: 154)

一見して現代英語と異なるところがあると認識されれば、その意味解釈においても注意するであろう。古英語や中英語のテキストは現代英語とは綴りや文法において異なることが顕著であるが、英語の歴史において、形態・統語上の大きな変化は中英語から近代英語に至る時期では現在の体系が構築される。近代英語の特に後期になると細かい用法の整備は引き続き進むが、表面上はほとんど現代英語と変わらないように見える。しかし、近代英語期は、社会構造や社会における規範のあり方の変化も

背景にあって語の意味は変化を続けているのである。

文献学的英語学の分野で、18世紀から19世紀の時代の英語については、特に語彙面で明らかにされるべきことがまだ多く残っている。そして、その状況が文学作品においても随所に見いだされる。本稿は、Jane Austenの小説を取り上げ、通時的視点を持ちつつ、テキストの解釈に踏み込んだ語の意味の解明を目指すものである。

## 2. 語の意味変化

まず、「意味変化」という概念について、語の意味変化を社会の変化との関連を意識しながら論じたHughes (1988)を参考に、整理しておきたい。Hughes (1988: 9-20) では、基本的に3つのアスペクトから意味変化を見ることができるとしている。第一は個々の語が時間とともに意味を変えてゆく経過、第二は新語が加わったり使われていた語が廃語になったりしてゆく語彙の変化、第三に、ある特定の社会の場面や表現上のコンテキストにおける語の選択に関わる変化である。第一の個々の語の変化はいくつかのパターンに分けられる。例えば、*box*はもともと木の種類で、その意味でのOEDの初例は931年である。その後、その木で作った箱、そして、現在では素材や大きさに関わらない箱という意味で用いら

れている。こういった変化は「一般化(*generalization*)」と呼ばれる。一方「特殊化(*specialization*)」は意味が狭まる変化で、例えば、*meat*は古英語期には食物の意味だったが、肉の意味に特化されてゆくというのは英語史では有名な例である。他に、*phenomenal* や *categorical* のように強意表現 (*emotive intensification*) となるもの、I. *firm* しっかりとその場に固定されたという意味からII. *rapid* 素早く動くという意味が発展している *fast* (OED s.v. *fast*) のように逆の意味を発展させるもの (*shift to opposite*)、意味が弱められるもの (*verbiage or weakening*) や婉曲表現 (*euphemism*) など指摘されているが、本稿で特に注目したいのは、語の評価的意味における変化である。

**Amelioration**, whereby a word takes on favourable connotations, and **deterioration** whereby it takes on pejorative associations, are often telling indications of social change. (Hughes 1988: 12)

意味の向上 (Amelioration) と劣化 (deterioration)、すなわち、語の使用に際し、その語が好ましい意味で使われているかあるいは好ましくない含意を持つかという

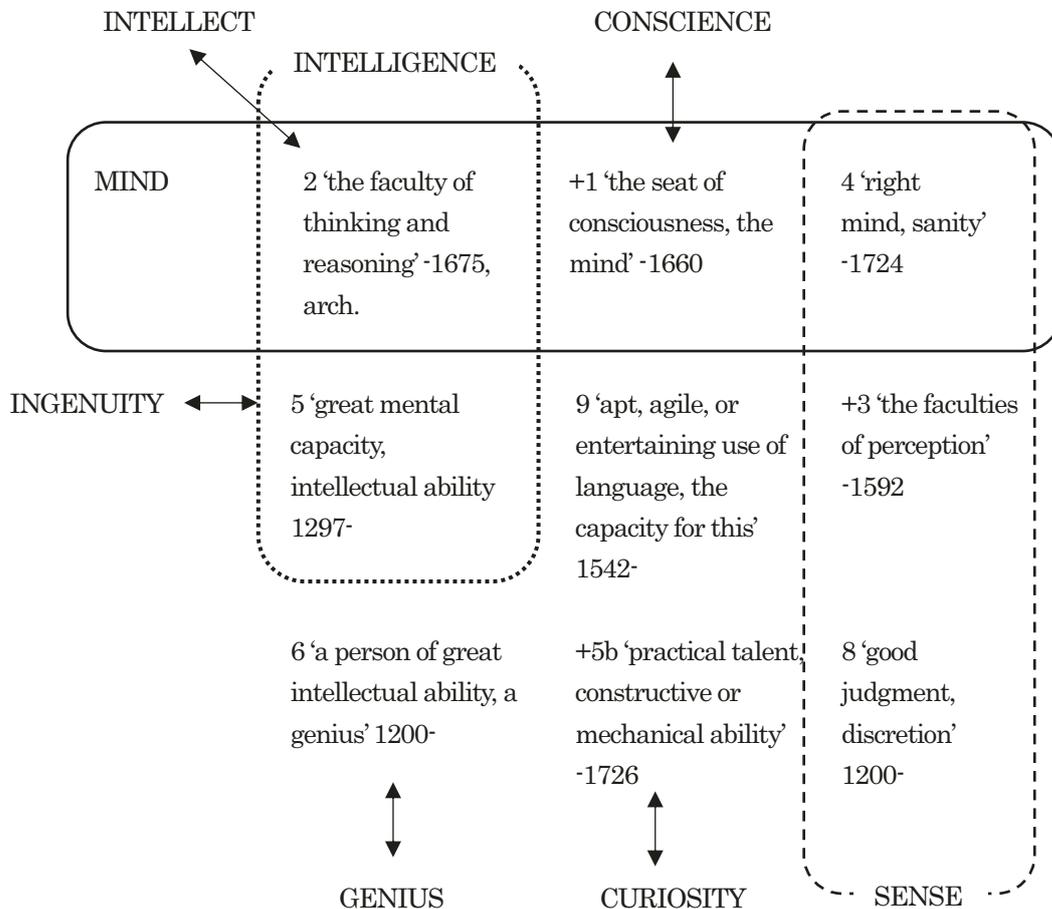


図1 Partial synonyms in the EModE field of intellect ('wit') (Görlach 1991: 197)

ことで、それは社会の変化と関係があることが指摘されている。

### 3. 類義語と意味の場

Görlach (1991: 195-197)は、類義性は重要な文体上の仕掛け(stylistic device)だとして、次のように述べている(下線は松谷による)：

The co-existence of partial synonyms can be very complex. In particular, paradigmatic relations can become confusing if sociolinguistic distinctions (according to class, style, formality and age) and the contrast between common words and special terminologies are also involved, or if diachronic considerations (old: new, fashionable use) including changes of meaning are to be described.

図1はwitという語の近代英語初期に至る意味変化と、部分的に意味が重なる類義語との関係性を描こうとした一つの例である(Görlach 1991: 197)。番号の前に付けられている記号+はOEDの†(廃用)の代わりに用いられ、また、記述や例文の年代については取捨選択されているようであるが、ここでは、Görlachに忠実に引用した。もちろん、図のようにすっきりと単純に割り切れるものではないが、少なくとも、witという語の意味が時代と共に微妙に変化し、その意味の可能性を拡げていること、また、そういった中で、複数の類義語がそれぞれの意味の場を担っていることが、端的に見てとれる。

例えば、図1で類義語として挙げられているintelligenceとgeniusは、Phillipps (1970)でも言及されている語である。Jane Austenの小説ではintelligenceは、「情報」の意味で用いられることが多いとしている。

An important ingredient of all conversation was *intelligence*, that is ‘information’ or ‘news’. This is the commonest meaning of *intelligence* in the novels, its usual modern meaning being generally conveyed by some such word as *genius*, … (Phillipps 1970: 86)

ここでは一例のみ引用するが、前に‘fresher’という形容詞、後ろに‘of her former friends’という前置詞句もあり、「情報」という意味を特定しやすい。このような場合は、コロケーションや物語の場面から意味の誤解は生じないであろう。

[1] It was yet in his power to give her fresher intelligence

of her former friends. (PP143)<sup>1</sup>

*genius*については‘an milder quality than the outstanding capacity for imaginative thought and creative ability that it suggests in present English’ (Phillipps 1970: 24)、つまり、現代よく使われる意味ほど強いものではなく、‘inherent ability, aptitude, and inclination for study and for developing the mind’ (Phillipps 1970: 24)という概念を意味すると述べている。[2]が「素質・適性」の例、一方で、現代的な意味もいくらか現れ始めているとして[3]を挙げている。

[2] “… Do you know, she says that she does not want to learn either music or drawing.”

“To be sure, my dear, that is very stupid indeed, and shows a great want of genius and emulation…” (MP19)

[3] Sir Thomas meant to be giving Mr. Rushworth’s opinion in better words than he could find himself. He was aware that he must not expect a genius in Mr. Rushworth. (MP186)

### 4. 語の評価の意味の変化

3で挙げた[1]から[3]は名詞について扱った例でもあり、英語史の知識や辞書的な記述をもとに、コロケーションや文の前後関係から判断すれば、その語の意味をある程度誤解なく特定できると言えるであろう。が、時に、意味変化の過渡期で、判断が難しい場合や、むしろ、その意味の重層性が生かされテキストが興味深いものになっている場合があると考えられる。

単語の評価の意味が時代とともに変化する現象を扱った最近の興味深い研究として、Hanks (2013)のコーパスによる語彙研究がある。語の評価の意味は、辞書の記述によってある程度は予測できるが、意味変化の過程においては、重層的であり、それぞれの使用における解釈は、時代背景をふまえて、誰がどのような場面でどのように用いているのかといったコンテキストを無視できない。語の評価の意味が変化する過渡期にある語は、作家によって巧みに用いられ、アイロニーに貢献する場合もある。

小説を読むということは読者に委ねられた活動であり、一度作家の手を離れた作品は読者がテキストを再構築して解釈は自由であるという考え方もあるであろう。しかし、本稿の立場は、作品が著された当時の英語の言語体系と社会背景のもと、作家の言語がどのように機能したのかを探るものである。語の意味変化は、語彙体系それ

自体の持つ内的・外的な要因もさることながら、社会的な価値観を反映するものである。時代における社会背景や人びとの考えかたといった言語外の要因が言語に与える影響は大きい。好ましい意味から好ましくない意味へ、あるいは、その逆に、好ましくない意味から好ましい意味へその用いられ方が変化していく時代の語彙が小説においてどのように用いられているのか分析を試みる。

#### 4.1 *amiable*

*amiable*はOEDで‘Worthy to be loved, lovable, lovely’  
と定義されている。基本的には好ましい価値を持つ語である。特に近隣の人々との付き合いとして、また、よい結婚をするための相手を求めるために、社交の場が重要な役割を果たしていた時代、‘*amiable*である’ことが好ましい。以下の例では、この語が人物描写において興味深い用いられ方をしている。

[4] … your *amiable* young man can be *amiable* only in French, not in English. He may be very ‘*aimable*,’ have very good manners, and be very agreeable; but he can have no English delicacy towards the feelings of other people: nothing really *amiable* about him. (E149)

Mr. KnightleyがEmmaとの会話の中でFrank Churchillについて評する場面である。EmmaのFrank Churchillへの高い評価に対し、博識な彼は語源のフランス語に触れつつ、物腰がよく人あたりはよいが人の気持ちを思いやるイギリス流の心の細やかさに欠けると、表面的な価値ではなく内面について語るものである。作家は、Mr. Knightleyのセリフを通して、Frank Churchillというキャラクターを描くと同時にMr. Knightley自身の価値観やEmmaへの感情も示唆していると言えるであろう。

#### 4.2 *sad*

通時的に観察すると、*sad*は2.で挙げた分類でいえば、逆の意味を発展させたもの(shift to opposite)と言ってよいであろう。その意味変化をOEDに沿って簡潔に記すと以下のような経緯をたどる。

† 1 Having had one’s fill; satisfied; sated, weary or tired (of something)

† 2 Settled, firmly established in purpose or condition

† 3 Strong; capable of resisting

† 4.a Orderly and regular in life; of trustworthy character and judgement; grave, serious. Often coupled with *wise* or *discreet*

5.a Of persons, their feelings or dispositions: Sorrowful, mournful.

6 Deplorably bad; chiefly as an intensive qualifying terms of depreciation or censure. Often *jocular*.

†が付いている4の意味までは廃用で、OEDでの引用例も17世紀半ばまでのものまでである。近代後期には5以降の意味での使用となるが、現代訳される「悲しい」という理解では誤解を生じることがある。例をいくつかMansfield Parkから挙げる。以下の例はいずれも上記のOEDの記述では6の‘Deplorably bad; chiefly as an intensive qualifying terms of depreciation or censure’にあたるであろう。Often *jocular*とあるが、[5]はMary CrawfordがFannyに向けて言ったもので、2回繰り返されていることや感嘆符の利用、また、後続の内容からもまさにあてはまりそうである。[6]の例は暖炉の火を、[7]では場所を修飾する形容詞として人間以外のものに用いられている。

[5] She said nothing, however, but, “*Sad, sad* girl! I do not know when I shall have done scolding you,” (MP357)

[6] “what a *sad* fire we have got, and I dear say you are both starved with cold. Draw your chair nearer, my dear…”(MP 379)

[7] “Her daughters were very much confined—Portsmouth was a *sad* place—they did not often get out…” (MP 401)

#### 4.3 *condescension*

まず、辞書的意味を確認しておきたい。基本的に「下る」(OED s.v. *condescend* v. I. To come down voluntarily.)という動詞から派生した名詞で、OEDでは次のように定義されている。

1. Voluntary abnegation for the nonce of the privileges of a superior; affability to one’s inferiors, with courteous disregard of difference of rank or position; condescendingness.

3. Gracious, considerate, or submissive deference shown to another; complaisance. ? *Obs.*

また、Johnsonの辞書では、‘Voluntary humiliation; descent from superiority.’とある。問題はこういった状況でどんな気持ちで「下る」かであろう。

Hanks (2013)は、コーパスを用いて*enthusiasm*や*condescension*といった語の評価的意味の変化を考察し、現代におけるその語の受けとめられ方と18~19世紀当時のそれとを比較している(Hanks 2013: 145-171)。極めて簡潔に言えば、*enthusiasm*が好ましくない意味から好ましい意味へと変化したのに対し、*condescension*は好ましい意味から好ましくない意味へと変化したという。もちろん、これは、単純に断定できるものではなく、語の使用の実際はその含意において、好ましい好ましくないの両極の狭間で揺れ、曖昧な場合もある。*Emma*では*enthusiasm*は用いられていないが、*condescension*は用いられている場面が数か所ある。評価的意味の変化の過渡期にあって、この語の果たす機能を考えてみたい。

Hanks (2013: 162)によると、*condescension*は現代英語のコーパスからは好ましくない意味が普通 (norm) だが、18世紀から19世紀には、好ましい意味も好ましくない意味も潜在的に持つ過渡期にあり、発話のコンテキストにおいてその評価的意味が決定する、特に、発話者と言及されている相手の社会的地位が影響するという。

throughout the eighteenth and nineteenth centuries, the word had both a positive and a negative meaning potential, the difference being determined by the context of utterance—in particular, by the social status of the utterer and of the persons referred to.

例えば、‘condescension and openness’ (Clarendon 1647, 上記の*OED*の1の定義の初例)というコロケーションであれば、好ましい性質であることがうかがえるし、一方、‘condescension and contempt’ (Kennedy 1990, in the BNC) というコロケーションで用いられれば、好ましくない感情であることが伝わる。さらに、*Pride and Prejudice*において、Mr. CollinsがLady Catherineに、例えば、‘such affability and condescension’ (PP 66) といったように用いる*condescension*に注目している。彼女のように滑稽なまでに自分の身分や威厳にこだわる人物に対して、偉ぶらず気さくなお方で…とすることこそがコリンズ氏自身を滑稽な人物として描き出しているという。コーパス上、十分な量とは言えないと断りつつも、18世紀の例はすべて好ましい意味であることを考慮すると、オースティンの作品におけるこの使用は評価的意味の過渡期にある語をコンテキストにおいてうまく利用した先駆的なものと言えるだろうと指摘している。

Jane Austenの主要6作品では、*condescension*は、*Pride and Prejudice*で7回、そして、*Mansfield Park*で1度、複数形でSir Thomasについて用いられている。評価的意味としては、まさに、善意から(‘well-meant’)では

あるが、新しい家に来たばかりで疲れきっておどおどするFannyにはなにも慰めにならない。

[8] In vain were the well-meant condescensions of Sir Thomas, and all the officious prognostications of Mrs. Norris that she would be a good girl; in vain did Lady Bertram smile . . . (MP 13)

Sir Thomas, Mrs. Norris, Lady Bertram、それぞれが三者三様にFannyに対しての様子を簡潔な言葉で描き出されている。

*Emma*では2回用いられているが、次の例は相手に近づく気さくさといった中立的な意味での使用といえるであろう。

[9] As Harriet now lived, the Martins could not get at her, without seeking her, where hitherto they had wanted either the courage or the condescension to seek her; (E180)

一方、次の例は、評価的意味においては多少微妙さを感じさせる。

[10] Emma did not repent her condescension in going to the Coles. (E231)

わざわざ後悔しなかったというのは、後悔する可能性を示唆するものであり、そうであれば、好ましくない行為ということになるであろう。実際、直後に‘She must have delighted the Coles—worthy people, who deserved to be made happy!—And left a name behind her that would not soon die away.’とあり、自分が身を下げて訪問してあげたのだといったEmmaの意識を示唆するものではないだろうか。

さらに、動詞の派生語として、*condescending*が使われている例がこの作品中1か所ある。*Emma*の視点からみた、Miss BatesがMrs. Eltonのことを評している場面である。Janeを気遣うMrs. Eltonのことを、たしなみがあって気取らない立派な人と感謝するMiss BatesをEmmaは面白く(‘with some amusement’)観察している。

[11] She looked on with some amusement.—Miss Bates’s gratitude for Mrs. Elton’s attentions to Jane was in the first style of guileless simplicity and warmth. She was quite one of her worthies—the most amiable, affable, delightful woman—just as accomplished and condescending as Mrs. Elton meant to be considered.

(E284-285)

Janeの世話をやきたがるMrs. Elton、それに感謝するMiss Bates、それを傍観するEmmaという4人の女性の関係性が構築されており、更に、「Mrs. Eltonがそう思われたいと思うほどのたしなみがあって気どらない…」には、Mrs. Elton自身の身分についての自意識と、それについてEmmaがどう思っているかが描き出されている。

### おわりに

Jane Austenの作品から意味変化の過程にあるいくつかの語に注目して、その語が作品の中で生み出す効果について考察した。ここで扱った小説において、作家の語りは非常に頻繁に主人公の視点に重なり、主人公の観察を通して周りの人物達が描きだされることも多い。そのような作品世界において、価値の重層性を描き出すのに語の多義性が効果的に機能する。作品が著された当時の英語の語彙体系における単語の意味変化をたどることは作品理解にも有意義であろう。時代を背景として、意味の幅を持つ*amiable*や*sad*といった語や、評価の意味が揺れその解釈に幅を持つ*condescension*といった語が効果的に用いられ、登場人物の人物像の形成やアイロニーの構築に貢献していると考えられる。

### 付記

本稿は科学研究費基盤研究（C）課題番号19K00419「18-19世紀の英国小説の語彙と文体：社会における人の認知と言語変化の観点から」の成果の一部である。なお、4.3は日本オースティン協会第8回大会（於：西南学院大学、2014年6月28日）で「Emmaにおける理性・道徳・感情に関する概念の表現」と題して口頭発表した内容の一部をもとにしている。

### 註

1. 以降Jane Austenからの引用はすべて*The Novels of Jane Austen* by R. W. Chapman (3rd ed. 1932-34; rpt. Oxford University Press, 1986)の版による。引用の後の（ ）内には作品の略号、PP: *Pride and Prejudice*、MP: *Mansfield Park*、E: *Emma*とページ数を表わす。引用内の下線は筆者による。

### 引用文献

- Görlach, M. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanks, P. 2013. *Lexical Analysis: Norms and Exploitations*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Hughes, G. 1988. *Words in Time: A Social History of the*

- English Vocabulary*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.
- Johnson, S. 1755. *A Dictionary of the English Language*. London.
- Phillipps, K.C. 1970. *Jane Austen's English*. London: André Deutsch.